

# 人権なら

2019年9月1日

第105号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

## 優生手術の被害者から話聞

### やまゆり園事件3年を迎えて集会

「やまゆり園事件から3年—優生手術の被害者の話を聞く」集会在7月27日、奈良市内であった。相模原やまゆり事件を考える会・奈良と、県障害者差別をなくす条例推進委員会が共催した。



主催者あいさつに続き、優生保護法裁判全国弁護団の板野陽一弁護士が裁判経過や問題点を述べた。県から、福祉医療部健康推進課の福井課長補佐、障害福祉課の畑澤主幹、疾病対策課の村田課長が出席。福井さんが「県の調査で対象とされる方は37人。1人の方のみ記録がある」。国の一時金支給法に基づく支援としては、「優生手術を受けた方へ」のチラシを市町村・病院などに配布した。「事件を知って身が震える思いだった」「優生思想は許せない」と話した。

### 北三郎さんが「国が私の人生を奪った」と

優生手術東京訴訟原告の北三郎さんの話と、渡辺哲久・ひまわりの家常務理事による北さんへのインタビューに移った。北さんは、1943年に仙台市で生まれた。母親は小さい頃に亡くなった。父の再婚もあって反抗。中学生の頃、児童養護施設に入れられた。14歳の時、施設職員に愛宕病院へ連れていかれ、「悪いところを取る」と手術された。その後、施設の先輩から「なんの手術か分かっているか」と聞かれた。「悪いところを取ったと聞いた」と答えると、「違う。子どもを生まなくする手術だ」と聞かされ、びっくりした。

その後、結婚したが、妻にも死の直前まで手術のこととは言えずにいた。昨年1月、飯塚淳子さんの仙台裁判が報道された。

新聞に「優生手術」と大きく出た。「これは俺が受けた手術じゃない



か」。怒りが沸いた。昨年12月、「一人でも多くの被害者に名乗り出てほしい」との思いから、共同代表に。

5月28日の仙台地裁判決に触れ、「国がわたしの人生を奪った。これからは闘い。あきらめません」と力強く語った。このあと、会場から質疑、意見が出た。

最後に、決議。植松被告の思想の底流にあるのは「優生思想」。これは私たち一人ひとりの心の中に潜むもので、それに向き合わなければ…。「どんな命も大切にされる社会を求めて闘い続ける」を採択した。

### 第11回奈良県「差別と人権」研究集会

◆9月7日(土)午前9時半～午後4時半

◆田原本町・田原本青垣生涯学習センター

◆テーマ 生きづらさに寄り添い、やさしさとぬくもりある地域づくり

◆記念講演 中川健史・一般法人「よりそいネットワークぎふ」代表理事、演題「生きづらさに寄り添い、共に生きる地域社会を！」

◆分科会 ①「社会的孤立—つながり支え合う地域づくり」(田中和博・県社会福祉協議会相談支援員ほか) ②「仲間との出会い、LGBTや優生保護法裁判を考える」(尾辻かな子・衆議院議員ほか)

◆参加費 3500円

## 不登校の経験を語る

### 宇陀直紀さんが三宅町人権学習講座で

第2回三宅町人権学習講座が8月9日、中央公民館であった＝写真。宇陀直紀さんが「学校に行きづらい経験と、いま」をテーマに話をした。宇陀さんは、不登校の経験があり、不登校の子どもたちの安心できる居場所をつくりたいと、4月にフリースクール「奈良スコール」を立ち上げ、活動している。



宇陀さんは自己紹介から話を始めた＝写真。吉野町生まれの23歳で、現在、奈良教育大学大学院生。一般社団法人なら人材育成協会の理事もしている。「不登校の経験を語る」ということで、話したいと思う、と切り出した。幼稚園の頃から、行くのが嫌で、よく休んだ。今、考えてみると、集団の中で一緒に何かをするのが苦手な子だった。小学校は1学年が9人、全校児童が36人の小さな山の学校。入学式の翌日から休み、その後、行ったり、休んだりだった。



### 人との出会い、つながりが大きな支えに

家族構成は父・母・祖父母(父方)と自分。そんな状況の中で、母の関係でフリースクールと出会い、行くようになった。「学校に行かなくて、そこに居ても何も言われない場所だった」。

しかし、「将来への不安」や、「学校に行かずサボっている自分」といった感情と、家庭・学校・地域でも、そう言われてきた「否定的な言葉が内面化されていて、自分を否定している感じ」が強く、小学3～5年の時期はフリースクールもよく休んでいたように思う。

中学卒業後の進路選択では、高校進学をせず、フ

リースクールを続けながら、高卒認定試験を受けた。その後、大学へ入学したが、うまく馴染めず、2年目に通信制の大学に編入。社会福祉士の資格を取得するなどした。

失敗もあったが、バイト(コンビニ、高齢者デイ、飲食店、工場屋、放課後デイ、子ども若者支援)などにも挑戦してきた、と一気に語った。

「外に出るきっかけ、支えになったこと」は、「フリースクール」(安心できる居場所)と出会ったこと。もう一つは、「役割」を得たこと。それで、「自信や達成感」「チャレンジしたいという気持ち」が大きくなった。アルバイトの経験や、人との出会いと繋がりが大きかった。

### 不登校者数は全国で14万4千人以上

不登校・引きこもりの現状と課題も話した。小中学校の不登校者数は小学校が35,032人、中学校が108,999人。合わせて、144,031人いる。子どもの数は減っているが、不登校の子どもは増えている。

「呼び方」も時代とともに変化していると紹介、1941年は「学校恐怖症」。1951年には、長期欠席児童・生徒の調査開始。1967年は「学校嫌い」。1983年は「登校拒否」。1998年は「不登校」。

最後に、宇陀さんは、4月から始めた「奈良スコール」が大切にしたいこととして、①子どもが学ぶ(主体的で自由な学び)②居場所をつくる(多様な人との出会い)③自分を生きる(さまざまな体験)について説明し、話を終えた。

\*\*\*\*\*

### ■「かいほう塾」夏教室は終了

夏教室の日はひどい雨に見舞われたこともあって、出席状況は良くなかった。

9月のかいほう塾は5日(木)、12日(木)、19日(木)、26日(木)の4日間



開講する。時間は午後7時から8時半まで。場所は三宅町中央公民館2階で。9月～12月日程は、式下中学校で配布していただきます。

## 「中村諦梁とその時代」を講義

### 奥本武裕・所長が第2回県民歴史講座で

第2回県民歴史講座が8月6日、県立同和問題関係史料センターであった。

第1講は竹田祥子・研究員が「中



世興福寺の日記にみる風呂」を、第2講は奥本武裕・所長が「中村諦梁とその時代」をテーマに、それぞれ講義した。

第1講。中世大和の僧侶の日記を対象にして考察。大乘院の風呂についての「先行研究」を紹介しつつ、①定例の風呂について②臨時の風呂ー「功德湯」/縁故者の追善供養のため人々を招いて行われた。「薬湯(薬風呂・湯治・五木一草など)」/治療と保健のための入浴として、また、来客に応じた風呂も立てられていたという。

「非人風呂」は癪者を中心とする非人を対象としたものと考えられる。『経覚私要鈔』にある大安寺での非人沐浴の記録や、『東院光暁毎月雑々記』にある般若寺の「非人垢すり供養」を紹介。さらに、さまざまな寺の風呂を紹介し、地域に住む人々の風呂ー古市の郷湯、郷民経営の銭湯について、『大乘院寺社雑事記』や、「先行研究」から5カ所が確認できる。また、「浄土寺から興福寺に対して、唱門師の銭湯への立ち入り禁止の旨の申請があり」、禁制札を遣わしたとの記載もある。風呂をテーマにして、地域社会の広がり、社会的関係が垣間見え、興味深かった。

### 中村諦梁は全水活動家、中村甚哉の父

第2講。これまでの部落問題研究では、全水青年同盟の活動家、中村甚哉(じんや・1903~45年)の父としてしか取り上げられなかった中村諦梁(なかむらた いりょう・1868~1919年)を、その時代とともに紹介。

式下郡梅戸村の特質として、1724年には、戸数(3

7戸・本百姓36)人口180、米の村高は284石7斗1升1合と高い本百姓率と安定した農村だった。村内最大の地主庄屋甚兵家(後の中村家)は、1895年に膠工場を操業。1913年に洋膠生産に移行。1947年にオリエント膠工業(株)を設立する。1913年の「部落実態調査」では、戸数64、人口367。小学校就学率100%には驚かされる。



「梅戸西光寺と三業惑乱」(さんごうわくらん・近世中期以降、西本願寺の学林<教学を学ぶための学校>で正統的学説とされてきた三業帰命節/さんごうきみょうせつ/をめぐる論争に端を発した騒動) 三業惑乱の過程で、勘兵衛は息子(真梁)を西光寺に入寺させ、「三業派」の活動の継続を図った。諦梁の父、中村諦信は西光寺真梁の子として生まれた。

### 「大和同志会」活動にも影響を与えた人物

諦梁は父の下で浄土真宗僧侶として修学。1882年に西本願寺で得度。1883年以降、森田無絃(むげん・幕末の儒者。森田鉄斎の妻)、中尾靖軒(せいけん・漢学者)に師事。京都で仏教学を、田原本の英語講習所で英語を学ぶ。その後、内村鑑三の『東京独立雑誌』へ入社。活動と人脈が広がっていく。

「諦梁と部落問題」では、岡本弥『融和運動の回顧ー私の小伝』(1941年)や、『大和同心会会長辞職届下書』(1899年)を紹介し、1899年結成の「大和同心会」(全国初、全県規模の部落差別解消運動団体)の会長を務めたことが推定される。「大和同志会」(1912年)の活動にも大きく影響を与えたのではないかと話した。最後に、中村諦梁の思想に触れ、中村甚哉の人・活動なども紹介した。



講義のあと、今年度の常設展示と特別展『中村諦梁とその時代』を、見学した=写真。



# 大和高田で平和のための戦争展

## ヒロシマ、ナガサキをはじめ、原発事故も展示

大和高田市職員組合・市教職員組合が毎年、大和高田市役所ロビーで開いている「平和のための戦争展」(=写真)を観た。

会場には、太平洋戦争の記憶を刻んだ遺品や、当時の状況を伝える写真や資料など、約300点を展示。原爆被害者団体が制作した広



島・長崎の原爆投下の惨状を伝える「原爆と人間 ヒロシマ、ナガサキ」や、大和高田市内への空襲の様子を伝える写真も。さらに、福島原発事故や、福井県での原発事故による近畿地方の汚染予測地図も展示。

## 「焼き場の少年」の写真パネルに衝撃

印象深かったのは、「焼き場の少年」との題名が付いた写真パネル(=写真)。撮影したジョーオダネルという元アメリカ海兵隊カメラマンの話が紹介されている

### 編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

1923年9月1日、関東大震災が起こった。多数の犠牲者が出た。そのとき、「井戸に毒を入れた」などのデマが飛び交い、朝鮮人が多数虐殺された。民間人だけでなく、軍や警察も関与した。地震は天災だが、虐殺は人災。東京都は長年、慰霊祭に追悼文を寄せてきた。が、小池知事は取り止めた。先日、映画「金子文子と朴烈」を観た。2人は震災後、官憲に捕まり、大逆罪で死刑宣告された。虐殺を正当化するためだった。当時の朝鮮人への差別はすさまじかった。が、文子は同地平に立って行動した。嫌韓意識が強まる今、両国の歴史を見据え直し、友好関係を築いていきたい。

(撮影場所は原爆投下後の長崎とされる)。

「焼き場に10歳ぐらいの少年がやって来た。少年の背中には2歳にもならない幼い男の子くくりつけられていた。少年は焼き場のふちまで進むとそこで立ち止まる。わき上がる熱風にも動じない。係員は背中の幼児を下ろし、足元の燃えさかる火の上に乗せた。まもなく、脂の焼ける音がジュウと私の耳にも届く。炎は勢いよく燃え上がり、立ちすくす少年の顔を赤く染めた」



\*\*\*\*\*

## 映画「工作—黒金星…」を観る

映画『工作—黒金星(ブラック・ヴィーナス)と呼ばれた男』を観た。1979年10月26日、朴正熙(パク・チョンヒ)大統領が暗殺された。「民主化要求」が高まり、光州で民衆が蜂起。全斗煥(チョン・ドゥファン)政権は武力で抑え込んだ。その政権末期、北への潜入捜査を命じられた南のスパイ黒金星の工作活動を描く。韓国社会の姿と、「国家と人」をあぶり出している。



『工作—黒金星と呼ばれた男』は、1980年5月の光州事件を描いた『タクシー運転手』、1987年1月14日、ソウル大生が警官の拷問で死亡した事件を発端にした民主化闘争を描いた『1978、ある闘いの真実』に続く実話に基づく映画。自分の目の前に広がる情景が覆されていく恐怖さえ感じる作品だ。

### ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター  
〒636-0223  
奈良県磯城郡田原本町鍵301-1  
TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833  
E-mail:info@nponara.or.jp  
http://www.nponara.or.jp/